読書

■ 集合住宅と日本人 新たな「共同性」を求めて 竹井 隆人〔著〕

他者を意識した緊張感ある共同体を

評・北田 暁大（東京大学准教授）

かなり論争的な本だ。タイトルを見ると、集合住宅におけるコミュニティーや共同的なまちづくりの重要性が、生温かい理想主義的な雰囲気を伴いながら描かれているのではないか、と私たちは考えてしまう。しかしこの本は、私たちが何となく「善きもの」と前提しているような「コミュニティー」や「まちづくり」のイメージに違和を決然と表明する。

たとえば、住民たちの交流を推進するコミュニティーの構築について。著者はその重要性を一定程度認めつつも、それが多くの場合曖昧な形で語られ「はなはだ情念的で表面的な意味合いでの人間同士のつきあい」として捉えられているのではないか、と論じる。コミュニティーをめぐる言論空間のなかで、住民の主体的な政治参加の契機が見失われつつあるのではないか、ということだ。では、住民の自主性が前面化しているようにみえる住民運動はどうか。これについても――「すべての」というわけではないだろうが――「住民運動に透けて見えるのは、自分たちの住宅を既得権とし、それ以後に建設される住宅のみに規制をかけるべきだという身勝手さ、あるいは……無責任さであろう」と手厳しい。著者が目指す「新たな共同性」は、表面的な相互交流でも他律的なまちづくりでもなく、住民による主体的な政治的共同性の構築＝ガバナンスを体現した意味空間において立ち現れてくる。それは内輪的なつながりを超え、他者が自らとは異なった存在であるということを前提とした緊張感溢れるものとなるだろう。

しばしば異質な他者との出会いを阻むものとして批判されるゲーテッド・コミュニティー（防犯のため構築された閉鎖空間）についても著者独自の分析が加えられており、監視社会論に対する問題提起として受け止めることもできる。評者は著者の「日本人」をめぐる文化論的考察のすべてに同意するものではないが、都市や住居空間の共同性の持つ複雑性について多くの理論的示唆を受け取った。論争を喚起する刺激的な本であることに間違いはない。

平凡社・2940円／たけい・たかひと 68年生まれ。著書に『集合住宅デモクラシー』など。

■ ネットカフェ難民 ド…

ネットカフェ難民には月最低9万円が必要で、そのうち6万が宿泊代と知って、思わず首を傾げた。わずか1畳の空間に1泊2千円かける

1泊2千円で…

い。あえて継続す背を向け、まっを拒むかのごとき

本書は25歳の無

関係にし
にして
している事
読者を欺
の前ふ
ぎる、
が、作中では美しくも魅力的に描かれている。二人の退廃的な愛は、バブル崩壊後の不景気、そして拡大する所得格差によって日本人の常識や倫理観が激変した

文芸春秋・1550円